



設定

社労士事務所所長 × ト라우マ持ちノンケ事務所職員

小規模な社労士事務所で働いている主人公。未経験から優しく色々と叩きこんでくれた所長に恩を感じていたが……。

本編と同じく前職ブラック企業勤務時代のトラウマを利用され、徐々におとされていく展開です。番外編は本編の10年前を舞台とし、本編主人公の先輩だった斉藤秀樹をメインにストーリーを展開しています。

イジメ、パワハラ、貞操帯、飲尿、デイルド責め、金的、スパンキング、アヘウホ鳴き、モブ姦等

エロシーンは徐々に増えていく感じです。

15500 字程度の作品で、画像のみ AI で作成しています。

登場人物

成田 晋三(なりた しんぞう)43 歳 事務所所長

表面上は優しい。人に「感謝」することを大事にしている。

斉藤 秀樹(さいとう ひでき)30 歳 勤務 3 年目

先輩は絶対という価値観を持つ。体育会気質。

坂田 徹(さかた とおる)45 歳 ブラック企業時代の上司

人をいびることが生きがい。

自失

社会人生活でも、体育会で染み付いた『先輩は絶対』の感覚で過ごしていた。多少厳しくされるのは当たり前。怒鳴られるのも成長の一部。そう思い込んでいた。大学ではそれで通じていたし、全然苦痛ではなかった。それは大学の先輩たちが本当は優しい人たちだったからなのだろう。

だが、上司の坂田は違った。自分が楽をしたいから、面倒な案件は全部押しつけてくる。「お前、若いんだからできるだろ？」と軽く笑いながら、彼自身は定時ぴったりに退社する。

ミスをすれば、人格を否定するような罵倒が飛んでくる。ただ怒りたいから怒るという感じだった。

宴会の席になれば「体育会出身ならさあ、余興いけるよな？」と、酔いに任せて無茶ぶりをする。裸踊りなんてのは当たり前で、尻にボールを入れて排出する産卵芸、ペニスにタバスコを塗られてもがき苦しむ姿を撮影されたり、人数が少ないと自慰行為をさせられたりもした。最初は笑って対応していたし、冗談の延長だと思って必死にくらいついていた。だが気づけば秀樹を見る周りの目も変わってしまっていた。

『こいつには何をしてもいい、いじっても怒らない便利な奴』そんな空気が職場全体に広がっている。その場限りの冗談だと思って我慢していたことが、いつの間にか日常へと変わっている。気づいた時にはもう、自分の立ち位置が完全に固定されていた。

皆しんどい仕事の中でどこかにストレス発散の糸口を求めている。そこに格好の獲物がいたのだ……。

「おい、これ今日までって言ったよな」

「申し訳ありません！」

「なんでできなかったんだ？」

「徹夜続きで取り組みましたが間に合いませんでした！」

「言い訳をするな！！お前が馬鹿だからできなかったんだろう！！そう言え！！」

「はい！自分が馬鹿だから間に合いませんでした！」

「ほら、尻を出せ、ペナルティだ」

「はい！」

同僚が後ろでカタカタとパソコンを打っている音が聞こえる中。パンツまで全てをおろし、上司に尻を差し出す。

パンパンパンッー！

何度も何度も尻を思い切り叩かれて、その乾いた音が事務室に響いている。親にお仕置きをされる子供のように尻を差し出している姿に、くすくすと嘲笑が聞こえていた。上司もいじわるそうな笑いをうかべ、まるで自分がショーの主催者であるかのように得意気に、大声で罵倒しながら秀樹の精神を削っていった。

秀樹は気づけばいつもボロボロで余裕がなくなっていた。

『もう辞めたい』何度も心の中で叫び、それでも逃げ出さなかった数年間……限界が来ていた。

会社に退職の意向を伝えると、坂田は最初は引き留めたが、自分の意志が

固いことを知ると渋々ながら了承した。秀樹という玩具を失いたくなかったの
だろう。ただそれだけの理由だ。

そして、会社を出ようとしていたときに、運命の出会いがあった。単発の依頼
であのブラック企業に来ていた今の事務所の所長。他人だというのに自分に
声をかけ、熱心に話を聞いてくれて、そして、「よかったら自分のところで働い
てみないか」と誘ってくれた。

当時の自分は雰囲気もきっと暗くなっていたし、仕事を途中で投げ出した形
になってしまったのに、何でおれを……という思いもあったが、「社労士は
『人』の専門家。会社で働くことの辛さを知っている人の方が向いている」その
言葉に感激したのを覚えている。

今の事務所に入ってから3年間は、本当にあっという間だった。

所長と秀樹だけの小さな事務所。所長のぶっきらぼうだけど誠実な叱咤、毎
日のように増えていく業務知識と経験。そのすべてが、前の会社で失いかけて
いた自分を少しずつ取り戻させてくれた。

最初の頃は、ちょっとした注意でも身構えてしまった。怒鳴られるのではない
か、見捨てられるのではないかと。けれど所長は違った。ミスをすれば理由を
聞き、できるようになるまで何度でも説明してくれた。

「この仕事は、数字より人間だ。人を見られなくなったら、終わりだよ。人への
尊敬と感謝を忘れないようにね」

所長が大事にしている理念。自分もその理念を貫き通したいと思った。少し

ずつ、肩の力が抜けていった。笑うことが自然になり、休日に外へ出る余裕もできた。そして気づけば、彼女ができて、一緒に過ごす時間が当たり前になっていた。幸せというのは、大きな出来事ではなく、静かに積み重ねていくものなのだと知った。

あの頃の自分に言ってやりたい。「早く抜け出せ。外にはちゃんとした世界がある」そう言ってやりたいと思える程度には、今の自分は幸せだった……。